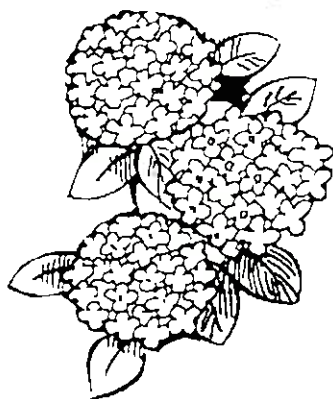


ひろば大代

NO. 251

大代公民館



盛会に終わりました

第九回関西高山会総会

関西高山会事務局長 中本 弘

六月十一日恒例の関西高山会総会を大阪市内の平安閣で開催した。平安閣といえは結婚式場といわれ、六月といえはジューンブライドと言われるくらいに集中する月である。総会は四階の広間で実施したが、一階ロビーは結婚式の花婿・花嫁・仲人等関係者でごつた返していた。

関西高山会の田辺会長の世話で、そ

れも四階すべてを貸し切つてやれた。とはさすがその手腕はたいしたものだと脱帽した。

さて、会は昨年八月志半ばで亡くなられた故市原仁郎氏の黙禱ではじまり、高山会が目ざしているふる里出身の原田萬里氏作「ここに幸あり」を出席者全員で唱和した。

笹木公民館長の大代町の現況と第十回都市交流会の盛り沢山の行事・同窓会の場としてほしいと要望を熱っぽく語られた。

東京高山会長の楠氏から共通の悩みは会員が高齢化しているので若い会員に入ってもらいたい旨を、総会は十一月十二日に開催すること、また大代高山会を中心に三位一体となり活動していこうとトツトツと話された。

田辺婦人会長は大代町の人口六二二名の四分の一は婦人会員、平均年齢は六十八才である。現在大代小学校との交流、生徒二十六名その内二名は中国人である。国際化の芽が育っている。と報告された。

高村連合会長は高山会発足以来、ずっと出席していただき大代のパイパスについて熱っぽく話された。

藤井房子氏は一万円札紙幣原料づくりを大代町発展の源としたいと力強く語られた。会場では同氏が持参されたNHKが放映したビデオ「ミツマタを原料とした一万円札紙幣づくり」を繰り返し放映し、ふる里も頑張っているけんな、あんた方も頑張りんさいやと参加者一同に知らしめた。

第二部は田中公道氏が、「荒城の月」
「帰れソレントへ」奥様のピアノにあわせ朗々と歌われた。六月二十五日に二千八百人入場できる大阪国際会議場でデビュー四十年ミレニアム・テノールリサイタルが楽しみである。

尚今年は出席者の顔触れが少し違つて東京から私の同級生、昭和二十九年大代中学校を卒業した正法寺の松島良範君をはじめ六名が出席したこと。また初めて大代公民館長の息子さんが出席されたことなど少しずつであるが新鮮さを与えた。

最後に全員で「故郷」を合唱し、本会は盛会に終わった。

会が高齢化する、マンネリ化である
と問題はあるが、一年に一回再会の喜び、無事確かめあう気持ち。人生に感激・感動を与える一日であると思えば大きな意味があると考えるのは私だけであろうか。

来年は第十回、開催は六月十日です。お待ちしております。有難うございました。



関西高山会に参加して

本郷 室田昇三

六月十一日第九回関西高山会に出席のため午前四時十分出発し、会場の南平安閣に十時三十分到着。十一時開会故市原仁郎氏に黙祷をし、会長初め来賓の方々の挨拶も終わり、十二時から二時まで懇親会がありました。

懐かしい顔、初めて逢う顔、色々でしたが皆大代の方、すぐに親しくお話しする事が出来ました。

婦人会の方が作られた^{フキ}路の佃煮と一緒に私の作った佃煮も試食をして頂きました。まだ買いたい人も有ったので

来年はたくさん持って来る約束をして午後十一時帰宅しました。

初めての出席でしたが、とても良い雰囲気でした。帰ってからも、たくさんの方からおいしかったと嬉しいお電話を頂き喜んでいますが、来年はたくさんのお話をどうして取るうか、どの様にして煮ようかと不安もいっぱい有ります。皆さんアドバイスして下さい。



体協の会長になって

本郷 和田 積

楽しみながらスポーツをすること。汗を流す爽快さを忘れてしまつて久しくありません。

スポーツや運動をするものから、ビールを飲みながら観るものになつてしまつた自分と、弛んでしまつたお腹を見るにつけ、「やだやだ」これが肉体的にも精神的にも中年なんだなど妙な郷愁感に浸りながら、今夜もビールを飲んでしまふ。

運動したい。でもなかなかきつかけがないと考えていた矢先に、体協の会長という大役を仰せつかることになりました。

今年度は町民体育会の他に、七月二日の「歩け歩け大会」一月頃の「卓球大会」を体協の事業として計画しております。

楽しく運動しようを目標に、たくさんの方が参加出来る機会作りをしてい

けたらと考えています。

私自身力不足ではありますが、役員の方や各自治会の皆様のお力をお借りしながら、二年間努めようと思っておりますのでよろしくお願い致します。

またご意見や提案をいただければ今後の活動に取り込んでいきたいと思っております。

運動後の爽快感を感じたい（ビールもね）。これが私の目的でもあります。



父の思い出

山田 渡利昭蔵

もう今年も半年を過ぎようとして、梅雨に入ったというのに暑い日が続いています。

父が亡くなったのはほんのこの間のような気がして、桜が満開の時期でした。月日が立つのは早いものです。

父は四十代の頃から療養生活を送り私たち兄弟は、高校、中学、小学生とたくさんいたので一人一人手分けしてよく家の手伝いをさせられました。

私が結婚をして五年目の昭和五十年に父が大怪我をして入院しました。その時子供は上が四才になっていました。

子供が小学校へ行く様になつたら田舎へ帰ろうと思っていたのですが、急に帰ることになりました。

そして、平成三年雲仙普賢岳の火砕流の年に食道の手術をしてから九年、少しずつ体力が衰えて八十五才の人生を全うしました。これも偏に皆様方の励ましの言葉と力添えがあったからこそだと思います。有難うございました。



食事の道具

関西高山会会長 田辺正義
料理研究家

「フォーク食文化」

ヨーロッパのナイフ・フォーク・スプーンで食べる歴史は、十五世紀のイタリヤで始まりヨーロッパ全域に普及したのは今世紀初頭のことです。

それ以前は全て手掴みでしたが、ナイフの場合ギリシャ・ローマ時代から中世にかけては食卓の食器はナイフだけでした。これも大皿の肉類を切り分ける道具で、各人が手に持って食事する道具ではなく、こうして切り分けられた肉を人々は手掴みで食べていました。そして脂などで手指が汚れることからテーブルクロスやナプキンが生まれました。

「肉を突き刺して口に運ぶ」機能を持ったフォークは十一世紀のイタリヤで使われ始め、先端が二つに分けられたものでした。